研究論文

# 大阪大学附属外国学図書館所蔵『満蒙漢三文合璧教科書』について

## On the *Man-Meng-Han Sanwen Hebi Jiaokeshu*（満蒙漢三文合璧教科書）of the Osaka University International Studies Library's collection

松　岡　雄　太
Yuta Matsuoka

In this paper, I will analyze the handwritten Japanese translation for Manchu in the *Man-Meng-Han Sanwen Hebi Jiaokeshu*（満蒙漢三文合璧教科書）, held in the Osaka University International Studies Library, and find out that it was translated by Shigetaro Watanabe（渡部薫太郎）, who taught Manchu as a lecturer at Osaka Foreign Language School. Watanabe is an important person in the history of Manchu language studies in Japan, as he learned Manchu and taught it to the students at educational institution at a relatively early period from the Taisho to beginning of the Showa era. The *Man-Meng-Han Sanwen Hebi Jiaokeshu* of the Osaka University International Studies library's collection, which contains his handwritten notes, is a valuable document because it allows us to get a glimpse of how he learned Manchu and taught it to the students.

キーワード
『満蒙漢三文合璧教科書』、『満州語教本』、渡部薫太郎、大阪大学附属図書館

## 1．問題提起

現在、大阪大学附属外国学図書館には『満蒙漢三文合璧教科書』なる満洲語の文献が３帙所蔵されている。これは清末の宣統元（1909）年に出された満洲語、モンゴル語、漢語の３言語合璧からなる満洲語の教科書で、編者は榮德なる人物である。８巻10冊（７・８巻はともに上下２分冊）からなり、各巻はそれぞれ60課（７・８巻は上下冊各30課ずつ）で構成されている。大阪大学附属外国学図書館に所蔵される３帙の『満蒙漢三文合璧教科書』のうち、２帙は請求記号が「C380/148/1～８（７・８は上下）」と同じであり、残る１帙は「Mn390/18/1～10」となっている（以下の【写真１】から【写真８】は全て大阪大学附属外国学図書館所蔵）。

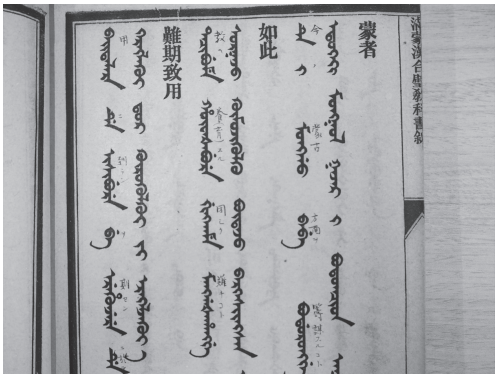
【写真 1】「C380/148/1 ～ 8」

【写真 2】もう 1 種類の「C380/148/1 ～ 8」

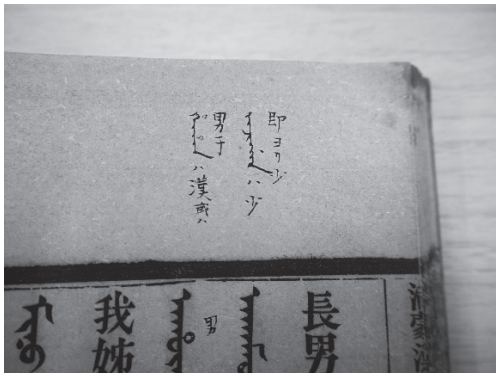
【写真 3】「Mn390/18/1 ～ 10」

このうち請求記号「Mn390/18/1 ～ 10」のものには、部分的にペンないしは鉛筆による書き込みが確認される。書き込みは大きく分けて、（a）本文満洲語の語句の右側ないしは左側にふされたその日本語訳（【写真 4】）、（b）上部余白に記された、満洲語の単語や文法またその意味に関するメモ（覚書）のようなもの（【写真 5・6】）、（c）本文満洲語の語句またはその漢語訳の上下ないしは右側になんらかの目的でもってふされた丸印や線など（【写真 7・8】）の 3 種類がある。

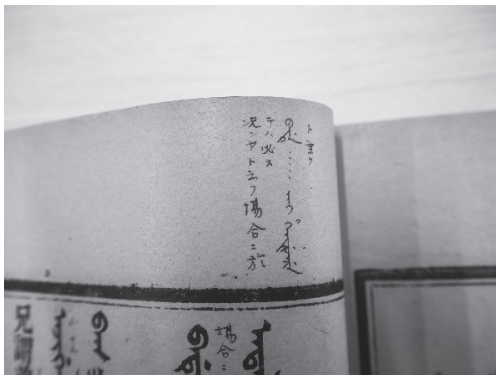
それぞれの書き込みがある箇所とその種類は、筆者が確認した限り、巻末の【附録 1】に示したとおりである。本稿では以下、これらの書き込みのうち、（a）「本文満洲語の語句の右側ないしは左側にふされたその日本語訳」に対する考察を通じて、少なくとも（a）の類のものの一部は、平成 19（2007）年に大阪大学と統合された大阪外国語大学の前身である大阪外国語学校で蒙古語部の学生に満洲語を教授していた講師、渡部薫太郎（1861-1936）[1)]の手によるものである可能性が高いことを論じる。



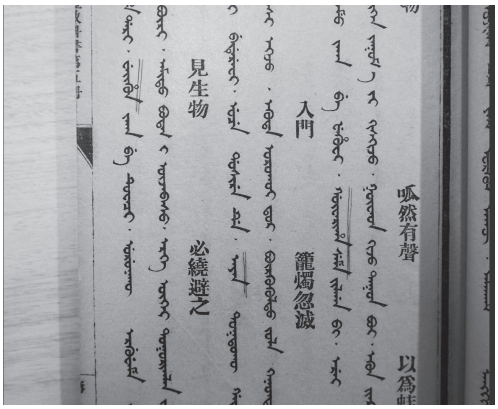

【写真 4】満洲語の右側にその日本語訳



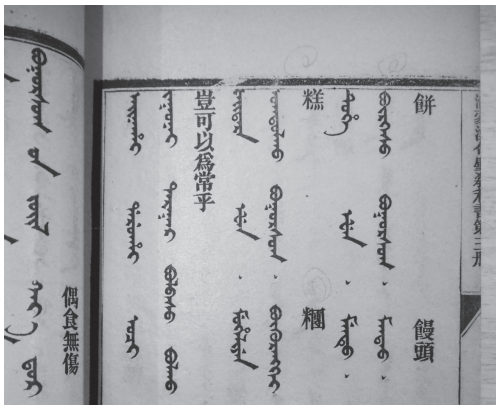

【写真 5】余白のメモ「haha（男子）ハ漢或ハ ajigan（即ヨリ少）ハ少」とある




【写真 6】余白のメモ
「況ンヤト云フ場合ニ於テハ必ス bade …… ai hendure ト書ク」とある




【写真 7】満洲語の右側に線




【写真 8】語句の上に二重丸

## 2.『満州語教本』と『満州語ヲ学ブ初歩』

2022 年末、大阪大学附属総合図書館の石濱文庫から、表紙に「manju gisun tacibure hacin –i bithe　jai debtelin（日本語訳：満洲語を教える科の書物　第二巻）」と満洲語の表題のみ書かれた一冊の本（以下、『満州語教本』）が新たに見つかった。全 21 丁（頁）[2]からなるこの本は、中途で途切れた話も含まれているが、全部で 20 の短い話を収録した満洲語の読本であり、話ごとに本文満洲語のあとにまとめてその内容の日本語訳がふされている。

この本の表紙の右肩には「1924.9.11 N. Kasai」と書き込みがある。この「N. Kasai」なる人物は、『大阪外国語学校一覧』の蒙古語部第 1 回入学生 13 名（大正 14（1925）年 3 月の卒業時には 11 名）の名簿に名前がある「笠井信夫」氏と見て間違いなく[3]、この本の元所有者であったと推測される（松岡 2023）。『満州語教本』の前半部分（以下の【表 1】に示す「tacikūi tanggin -i halhūn šolo 避暑休暇」の課から「tiyan jin ba 天津」の課、2 ～ 7 頁）には、満洲語の日本語訳をはじめ、その他さまざまな書き込みが鉛筆でなされているが、後述するように、これも元所有者と推測される笠井氏の手によるものである可能性が高い。

また、表題の「jai debtelin（第二巻）」という部分から、この本は複数巻（最低でも第一巻）の存在が含意される。以上の『満州語教本』について、松岡（2023）では（1）の 3 点について明らかにした。

（1）（a）本書の著者は大阪外国語学校蒙古語部で満洲語を教授していた渡部薫太郎である。
　（b）本書は渡部が大阪外国語学校で大正 13（1924）年度第 2 学期以降に満洲語を教える際に使用する授業用教材（教科書）としてその直前に作ったものである。
　（c）本書は恐らく上下 2 巻本の下巻にあたり、上巻は上原（1966: 57-60）がその存在を指摘する『満州語ヲ学ブ初歩』（この表題の右には「manju gisun tacibure tuktan bithe」（満州語を学ぶ初めの本）とある）[4]である。

『満州語ヲ学ブ初歩』と『満州語教本』の底本はともに『満蒙漢三文合璧教科書』である。上原（1966: 57-60）は『満州語ヲ学ブ初歩』の底本について、「第十一以下は、第十四を除いて他はすべて「満蒙漢三文合璧教科書」（manju monggo nikan ilan acangga šu -i tacibure hacin -i bithe ── 満蒙漢の三つを合した文の教科の書物 ── 宣統元年（1909）序）の第一巻にあるものから転載している」と述べる。同様に、『満州語教本』の底本も『満蒙漢三文合璧教科書』であり、転載元となった箇所は以下の【表 1】に示すとおりである。

全 20 話ある『満州語教本』のうち、1、19、20 の 3 話を除き[5]、残りの全て『満蒙漢三文合璧教科書』の巻 2 以降にほぼ同じ内容が確認される。上原氏によれば、上巻にあたる『満州語ヲ学ブ初歩』は『満蒙漢三文合璧教科書』の巻 1 から適当な課を底本にしているということな

**【表 1】『満州語教本』の底本となった『満蒙漢三文合璧教科書』の該当箇所**

| 課 | 『満州語教本』の内容 | | 底本 |
|---|---|---|---|
| 1 | tacikūi tangkin［sic.tanggin］-i halhūn šolo | 避暑休暇 | 不明 |
| 2 | afara baita | 職業 | 巻 2 第 47 課 |
| 3 | aniya inenggi | 元旦 | 巻 3 第 1 課 |
| 4 | amba aga | 大雨 | 巻 3 第 59 課 |
| 5 | šun | 太陽 | 巻 4 第 1 課 |
| 6 | wasington | ワシントン | 巻 4 第 32 課 |
| 7 | bethe bohire jobolon | 纏足之害 | 巻 4 第 36 課 |
| 8 | dulimbai gurun | 中国 | 巻 4 第 23 課 |
| 9 | beyebe iliburengge | 身立 | 巻 5 第 1 課 |
| 10 | gūnin gingsire irgebun | 詠懐詩 | 巻 5 第 44 課 |
| 11 | tiyan jin ba | 天津 | 巻 6 第 45 課 |
| 12 | morin feksire arbun -i dengjan | 走馬灯 | 巻 7 第 3 課 |
| 13 | duin yabun | 四行 | 巻 7 第 20 課 |
| 14 | erileme guwendere jungken | 時計 | 巻 7 第 5 課 |
| 15 | olhon de tebderengge | 陸運 | 巻 7 第 25 課 |
| 16 | jasigan be ulara kuwecike | 伝書鳩 | 巻 7 第 42 課 |
| 17 | beneme bure amasi karularangge | 投報 | 巻 7 第 60 課 |
| 18 | jiyoo boo ji ii | 塙保巳一 | 巻 8 第 24 課 |
| 19 | jiowang ni ulha isus ejen hese | 約翰福音 | 不明 |
| 20 | yaya manju bithe hūlara niyalma de | 満語学者ニ注意 | 不明 |

ので、下巻にあたる『満州語教本』が巻 2 以降を底本にしていてもさほど不自然ではあるまい。

## 3.『満州語教本』と『満蒙漢三文合璧教科書』

本章では『満州語教本』の本文満洲語のあとにふされた日本語訳と、大阪大学附属外国学図書館に所蔵される請求記号「Mn390/18/1 ～ 10」の『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込み日本語訳の対照を行なってみたい。巻末の【附録 1】と上の【表 1】を照らし合わせると分かるが、請求記号「Mn390/18/1 ～ 10」の『満蒙漢三文合璧教科書』において日本語訳の書き込みがある課のうち、『満州語教本』に転載されたのは「afara baita 職業」、「aniya inenggi 元旦」、「šun 太陽」、「jasigan be ulara kuwecihe 傳書鴿」のわずか 4 課のみである。このうち、『満州語教本』における「šun 太陽」の課は、満洲語本文の後ろに日本語訳がなく、代わりに（2）に示すような漢語訳が載っている[6)]。

（2） 太陽居空中。其体最熱。故能発光。以射地上。有生之物。皆籍太陽之光与熱。以生以長。

故常居室内之人。面色多淡白。草木之生於陰地者。往々不能茂盛。皆因其少見太陽也。

したがって、日本語訳を対照できる課は、「afara baita 職業」、「aniya inenggi 元旦」、「jasigan be ulara kuwecihe 傳書鴿」の残る 3 課となる。該当課の日本語訳を対照した全文は、末尾の【附録 2】に掲載してあるが、一見して分かるのは、『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込み日本語訳が欠如している箇所は若干あるものの、両者は大変似ているということである。とりわけ「jasigan be ulara kuwecihe 傳書鴿」の課に見られる以下の（3）、（4）の箇所からは、両者が明らかに同一人物の手によるものであると推測できる。以下、本文中に示す全ての例文において、2 種類ある日本語訳は上段が『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込み、下段が『満州語教本』のものである。

（3）（a）sung gurun -i kioi duwan cooha be dasara de, hergin fafun cira getuken
宋 國 ノ 曲 端 軍（兵）ヲ 統治スル 時 紀 律 厳 明
宋 国 ノ 曲 端 兵 ヲ 治ムル 時。紀 律 厳 明。
（b）geren cooha dartai andande isifi, gejun uksin gehun giltaršame, kiru turun narhūn genggiyen
衆 兵 忽然 瞬間 到リ 戈 甲 燠 燦 旗 幟 精 明
各 軍 頃刻ニシテ 集リ。戈 甲 燠 燦。旗 幟 精 明。

（3）は、その前後がそれぞれ日本語で訳されているのに、この箇所だけが両者とも漢語のままであり、かつ使用されている漢字も全く同一の例である。偶然の一致とは考えにくい。

（4）（a）ememu ede akdame jasigan ulara baitalan obumbi,
或ハ 此所［此点］信頼シ 信ヲ 傳フル 用メアシム［用ヲ］［ナサシム］
或ハ 之ニ 籍リテ 書ヲ 送ル［傳ル］用ヲナサシム。
（b）bi baicame tuwaki seme sehede,
我 査ス可キ 視ント欲ス ト 云ヒニ於テ［云ヒシ時］
我 察視シ度タイ ト 云フタ特［sic. 時］

（4）は『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込みの左右適当な箇所にさらに追加で書き込みがなされている例である（［　］で示してあるのが追加の書き込みの内容）。（4）を見ると分かるように、追加の書き込みは『満州語教本』の訳文と極めて通じている。ここから推測されるのは、『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込みは全体的に『満州語教本』の編集時以前になされたものであり、追加の書き込みが『満州語教本』の編集時になされたのではないかということである。

いずれにせよ、この類似点も両者が同一人物の手によるものとする証拠となりうる。

一方で、両者の訳文は全くの同一というわけではなく、細かな点においては違いも見られる。まず、以下の（5）と（6）の例から見てみよう。（5）は「afara baita 職業」から、（6）は「aniya inenggi 元旦」からの例である。

（5）（a）urunakū afara baita bi, bithe hūlarangge bithei niyalma sembi,
必 攻ム可キ 事 書 読ム者 書物ノ 人 ト云フ
必ズ 職業 アリ。書ヲ 読ム者ヲ 学者ト云ヒ。
（b）usin -i haha weilere faksi hūdai urse coohai urse, gemu bithe hūlaci acambi.
田ノ 人 製造 博士[7] 商 者 兵 丁 皆 書ヲ ヨム 可シ
士農工商 皆 書物ヲ 読ムヲ 宜トス。

（5a）の「afara baita」を直訳すれば「攻ム可キ事」、「bithei niyalma」を直訳すれば「書物ノ人」であるが、これらをそれぞれ「職業」、「学者」と訳してあるほうが当然日本語としては自然である。（5b）も同様に、語順も変えながらも下線部を「士農工商」としているのは、自然な日本語訳を意識した結果であろう。このように『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込み日本語訳が専ら逐語訳であるのに対し、『満州語教本』の訳文は直訳によらない、より自然な日本語になっている。

（6） aniya inenggi de, ahūn deo -i emgi, eshen -i boode isifi aniya de urgun -i acanjifi,
年［ノ］日 ニ於テ 兄［ハ］弟 ト 共ニ 叔父 ノ 家ニ 到リ 年 ニ於ケル 禧ニ
行キ合ヒ［行キニ合ハセ］
元旦ニ。兄弟 共ニ。叔父 ノ 家ニ 年賀ニ 来タ。

（6）の「aniya inenggi」、「aniya de urgun」を直訳すればそれぞれ「年（ノ）日」、「年ニ於ケル禧」であるが、『満州語教本』ではこれらがそれぞれ「元旦」、「年賀」と訳されている。後者のほうが自然なことは言うまでもない。以上、（5）、（6）のような事例は【附録2】を見ると分かるが比較的に多く見られる。このように全体的に、『満蒙漢三文合璧教科書』の訳文は逐語訳の傾向があるのに対し、『満州語教本』の訳文はより自然な日本語になっている。前者が逐語訳になっているのは恐らくは一つ一つの満洲語の語義を正確に把握しようとつとめたせいだろう。後者が自然な日本語になっているのは現場で使用する教科書として訳文に自然さを求めたためと考えられる。

次に、（7）と（8）の例を見てみよう。（7）、（8）はともに「afara baita 職業」からの用例である。

（7） usin tarirengge usisi sembi, ulin jaka weilerengge faksi sembi, ulin jaka tuwelerengge hūdai urse sembi,
田ヲ 耕ス者 農ト 云フ 貨 物 作ル者 博士 ト云フ 貨 物 賣ル者 商フ 者 ト云フ
田ヲ 耕ス者ヲ 農ト 云ヒ。貨物ヲ 造ル者ヲ 工 ト云ヒ。貨物ヲ販売スル者ヲ商ト云フ。

（7）は（5a）のあとに続く文である。注目すべきは、動詞「sembi」の箇所であり、「-mbi」は主節の動詞語尾（終止形）なので、「云フ」とするのが訳文としては正確である。『満州語教本』ではこれが「云ヒ」と満洲語の文法を無視する形で、接続形であとの文に続くかのように意訳されている。だが（5a）の最後の「sembi」も「云ヒ」と訳してあることから、恐らくこれは「士農工商」の説明箇所を一つにまとめようとした結果ではないかと思われる。『満州語教本』には（7）のように終止形語尾と接続形語尾を逆に訳してある箇所が比較的多くある。これもまた『満州語教本』の日本語訳が自然さを求めた一例と言えるだろう。

（8） niyalmai beyebe ilibure de,
人 身ヲ 立ツル ニ於テ
人ノ 我カ 身ヲ 立ツル ニ際シ。

（8）は「afara baita 職業」の出だし部分である。『満州語教本』には本文満州語にない「我カ（ガ）」という訳語が追加されている。これも『満州語教本』が自然な日本語訳を目指していた証拠の一つと言えよう[8)]。最後にこれまで述べてきた要素が一同に確認される箇所の用例を挙げる。以下の（9）は「aniya inenggi 元旦」からの例である。

（9） sarašame efire ajige baita, ureburakū hono muterakū bade, tacin fonjin be ai hendure sehebi.
遊ヒ 戯レン 小ナル 事[モ] 習ハズ[サレバ] 又 能ハズ[ザル] 場合ニ 於テ 学問ヲ 何ト 曰ハン[ト] 云ヘリ
遊戯スル 小事。習ハサレバ 是 又[不可]能ノ場合デアル。学問 ニ於テハト。

第一に、「sarašame efire ajige baita」は二つの動詞「saraša-」、「efi-」がともに「ajige baita」にかかる構文である。一つ一つの語句や文法を意識して正確に訳すると「遊ヒ戯レン小ナル事」となるが、「遊戯スル小事」のほうが日本語としてはこなれている感じがする。第二に、「bade」は名詞の「ba」（ところ）に与位格の「de」（に）がついているので、「場合ニ於テ」が正確だが、『満州語教本』では「場合デアル」とそこで文を切っている。第三に「tacin fonjin be ai

hendure sehebi」は、一つ一つの語句や文法を意識して訳すと「学問ヲ何ト曰ハン［ト］云ヘリ」となるが、『満州語教本』では反語的に意訳をしている[9)]。

## 4．結論と今後の課題

以上、本稿では『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込みのうちの日本語訳を中心に、転載された『満州語教本』の日本語訳との比較を通じて、その書き込みの主について考察を行なった。少なくとも上で考察した日本語訳の箇所は全て渡部薫太郎の手によるものと考えてよいだろう。書き込みのうち、黒ペンによるものと赤鉛筆によるもの（【附録1】を参照）は全体的に筆跡や字体が似ているので、これらの書き込みも渡部薫太郎の手によるものと考えて問題ないと思われる。だが、日本語訳のうち、黒鉛筆によるものはペンによるものよりは丁寧に書かれておらず、殴り書きしたような文字であるため、これも渡部薫太郎の手によるかは、今後、その書き込み内容を精査していかなければならない。線や丸なども同様である。

少なくとも黒ペンと赤鉛筆による書き込みが渡部薫太郎の手によるものだとすれば、次に問題となるのは「この書き込みがいつなされたのか」である。この点に関して、上記の（4）において、追加の書き込みが『満州語教本』を編纂した時点のものであり、その他大部分の書き込みは、それ以前のものではないかと推測した。もし『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込みが全体的に『満州語教本』の編纂時にふされたものであるならば、もっと『満蒙漢三文合璧教科書』に日本語訳がふされた課が『満州語教本』に反映されていてもよいはずである。しかし、実際はそのような課は4課分にすぎず、残る大部分の『満州語教本』の課は、『満蒙漢三文合璧教科書』で日本語訳がふされていない課から転載されている。このことは『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込みが『満州語教本』の編纂時より以前に行なわれたことを示唆している。ただし、現段階においてこの「編纂時以前」が具体的にいつかを断定するのは困難である。推測にはなるが、それは比較的早い時期、あるいは渡部薫太郎が満洲人の「成蔚」なる人物に就いてはじめて満洲語を学んだ時点などではあるまいか[10)]。仮にそうだとしたら、『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込みは渡部の満洲語学習の痕跡であり、渡部がいかにして満洲語を学んだかを考察する材料を我々に提供してくれる。いずれにせよ、今後この書き込みをより綿密に分析することによって、渡部がいかにして満洲語を学んだかに加え、どのような意図や方針でもって『満州語教本』や『満州語ヲ学ブ初歩』を編纂したのかもわかるだろう。渡部薫太郎が大阪外国語学校で行なった満洲語の授業は教育機関において満洲語が教えられた先駆けとなる事例であり[11)]、日本における満洲語学史の重要な1ページでもある。書き込みの詳細な分析は今後の課題としつつも、現状上原久氏のみぞ知る『満州語ヲ学ブ初歩』の発見を待ちたい。

**注**

1）渡部薫太郎の経歴などについては、金珽実（2017）、長田（2022）を参照のこと。

2）『満州語教本』にはさまる図書分類カード（のようなもの、作成者不詳）には同書が全 18 丁との記載がある。『満州語教本』の目次にある最後の課「yaya manju bithe hūlara niyalma de 満語学者ニ注意」に 17 丁とあるので、カード作成者はそこから判断したものと思われる。しかし、『満州語教本』の目次からは本来あるべきはずの「bethe bohire jobolon 纏足之害」の課が抜け落ちており、それにともなって実際は頁数がずれている。筆者が数え直したところ全 21 丁（頁）が正しい。

3）石濱純太郎は大正 11・12 年の 2 年間、『大阪外国語学校一覧』に蒙古語部の選科生として名前がある。したがって、笠井信夫と石濱純太郎は少なくともこの 2 年間同じ教室でモンゴル語を学んだ間柄だと考えられる。ちなみに、1888 年生まれの石濱は大正 11 年には 34 歳である。

4）筆者は『満州語ヲ学ブ初歩』を未見であり、いくら検索してもどの図書館にも所蔵が確認されないため、現状、上原氏のみがその内容を知るものである。したがって『満州語ヲ学ブ初歩』に関する内容については、専ら上原（1966）に依拠するよりほかにない。

5）松岡（2023）ではこのうち第 1 話目の「tacikūi tanggin -i halhūn šolo 避暑休暇」が渡部自身の手による作文である可能性の高いことを指摘した。

6）（2）の漢語訳は、底本である『満蒙漢三文合璧教科書』に載っている漢語訳をそのまま転載したものである。『大阪外国語学校一覧』によると、大阪外国語学校蒙古語部の学生は、蒙古語と満洲語のほかに、漢語（中国語）も学ぶことになっているから、ここで漢語訳のままになっているのはその辺に理由があるのかもしれない。なお、渡部薫太郎が在職中に死去したのち、蒙古語部の学生は、満洲語の代わりにロシア語を学ぶことになった。

　なお、このように日本語訳の代わりに漢語訳があてがわれている課は、「šun 太陽」のほかに「bethe bohire jobolon 纏足之害」と「gūnin gingsire irgebun 詠懐詩」の課がある。

7）「faksi」を「博士」と訳しているのは誤訳であろう。「faksi」は「工匠、職人」程度の意である。

8）（8）はさらに「ilibure de」の訳文が「ニ於イテ」と「ニ際シ」と違っているが、この点に関しては、『満州語教本』に見られる、笠井氏の手によるものと推測される鉛筆の書き込みが、「人ノ 自分立ツル ニ（時ニ）」となっているのが注目される。「ニ（時ニ）」と書かれたメモの日本語訳は「ニ際シ」の意味に近い。『満州語教本』の書き込みが笠井氏のものであると仮定するなら、それは渡部薫太郎が授業中に教授していた内容を笠井氏がメモしたものである可能性が高く、満洲語の「形動詞 -ra ＋ 与位格 de」構文を「～するときに」と訳すよう、渡部は説明していたのかもしれない。

9）笠井氏の手によると推測される書き込みには「学問 アア」とある。この「アア」は心の叫び声であろう。

10）渡部薫太郎の著書『満語文典』（1918）の冒頭にある「満語学叢書刊行之辞」には「（前略）……射利ノ目的ヲ以テ女真ノ故地、即清ノ発祥地ト称スル間島ニ来リ。偶支那文学ニ精通セル満人成蔚氏ト相知リ、日満語学ノ変換教授ヲナセリ。コレ余カ満語ヲ研究スル第一歩トス。是ニ於テ余ハ満語其物ノ姓質及価値ヲ認ムルト同時ニ射利ノ念ヲ棄テ、専ラ満語ヲ修メテ文学界ニ益セント決心セリ。……（後略）」とあり、またその時期については『満洲語文典』（1926）の「自序」に「（前略）……余が満洲語を学び始めしは、日露戦後の血痕未だ乾かぬ時で、明治四十一年桃李の花が咲き乱れる五月であつた。……（後略）」とある（句読点と下線は筆者による。漢字の旧字体は新字体に改める）。

11）渡部（1934: 7–8）は、自身が大阪外国語学校で教鞭をとるに至った経緯とともに「偖て中目校長先生先年柯太オロツコ又ニリブン人の言語を調査し、各文典の著をなさいました関係で満洲語の智識を得られました不斗したる事で、語学上の事で私と交際を初めました（ママ）同校長は蒙古語と満洲語の関係

の深きを観ぜられし結果満洲語を学校に加へられましたにつき世界に於て三校の一に加へられる様になりました。これは学界の為に大いに慶す可き事でありまして西洋の学者に対しても大に面目を保つ次第であり、又日本外国語学史上に光彩を與へたものと信じます」と述べている（下線は筆者による）。

## 参考文献

上原久（1965）「渡部薫太郎の満洲語学（1）」『埼玉大学紀要 人文科学篇』14: 1-17.

上原久（1966）「渡部薫太郎の満洲語学（2）」『埼玉大学紀要 人文科学篇』15: 1-60.

長田俊樹（2022）「宣教師的語学者・渡部薫太郎 ── 石濱シューレの人々（1）── 」『KOTONOHA』233: 1-44.

金珽実（2017）「満洲・間島における日本人 ── 満洲語学者の渡部薫太郎を中心に ── 」『韓国言語文化研究』25: 69-85.

松岡雄太（2023）「大阪大学附属図書館石濱文庫所蔵『manju gisun tacibure hacin –i bithe（満州語教本）』について」『関西大学外国語学部紀要』29: 1-15.

渡部薫太郎（1934）「満洲語漫談」『朔風』4: 1-8、満蒙研究会

## 資料

『大阪外国語学校一覧』大正 11 年度～昭和 18 年度

**【附録 1】『満蒙漢三文合璧教科書』における書き込みの箇所とその種類**

| 巻 | 課 | 書き込みの種類 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 叙 | 日本語訳 | 最初から 6 頁表まで |
| 1 | 6 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 9 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 10 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 11 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 12 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 13 | 日本語訳・余白メモ | 日本語訳は部分的・余白メモは 10 頁表【写真 5】 |
| 1 | 14 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 15 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 16 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 17 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 18 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 19 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 20 | 日本語訳 | 部分的 |
| 1 | 21 | 日本語訳 | 全語句 |
| 1 | 22 | 日本語訳 | 全語句 |
| 1 | 23 | 日本語訳 | 全語句 |
| 1 | 24 | 日本語訳 | 全語句 |
| 1 | 25 | 日本語訳 | 全語句 |
| 1 | 26 | 日本語訳・余白メモ | 日本語訳は全語句・余白メモは 21 頁表 |
| 1 | 27 | 日本語訳 | 全語句 |
| 1 | 28 | 日本語訳 | 全語句 |
| 2 | 30 | 日本語訳 | ほぼ全語句、赤鉛筆らしきものによる |
| 2 | 38 | 日本語訳 | ほぼ全語句、赤鉛筆らしきものによる |
| 2 | 40 | 日本語訳 | 部分的、書き込みは満洲語の左側 |
| 2 | 47 | 日本語訳 | ほぼ全語句 |
| 2 | 49 | 日本語訳 | 全語句、赤鉛筆らしきものによる |
| 2 | 50 | 日本語訳 | 全語句 |
| 2 | 56 | 日本語訳 | 全語句、赤鉛筆らしきものによる |
| 2 | 57 | 日本語訳 | ほぼ全語句、赤鉛筆らしきものによる |
| 2 | 58 | 日本語訳 | 全語句、赤鉛筆らしきものによる |
| 2 | 59 | 日本語訳 | ほぼ全語句、赤鉛筆らしきものによる |
| 3 | 1 | 日本語訳・余白メモ | 日本語訳は全語句・余白メモは 2 頁裏【写真 6】 |
| 3 | 2 | 日本語訳・余白メモ | 日本語訳は全語句・余白メモは 3 頁表裏 |
| 3 | 3 | 日本語訳・余白メモ | 日本語訳は全語句・余白メモは 5 頁表裏 |
| 3 | 4 | 日本語訳 | 全語句 |
| 3 | 5 | 日本語訳 | 全語句 |
| 3 | 6 | 日本語訳・余白メモ | 日本語訳は全語句・余白メモは 9 頁表と 10 頁表 |
| 3 | 7 | 日本語訳 | 全語句 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 3 | 8 | 日本語訳 | 全語句 |
| 3 | 9 | 日本語訳・余白メモ | 日本語訳は全語句・余白メモは 13 頁表裏と 14 頁表裏 |
| 3 | 10 | 日本語訳・余白メモ | 日本語訳は全語句・余白メモは 15 頁裏 |
| 3 | 11 | 日本語訳・余白メモ | 日本語訳はほぼ全語句・余白メモは 18 頁裏と 19 頁表 |
| 3 | 12 | 日本語訳 | 全語句 |
| 3 | 13 | 日本語訳・余白メモ | 日本語訳は全語句・余白メモは 21 頁表 |
| 3 | 27 | ◎印 | 45 頁表裏、黒鉛筆らしきものによる |
| 3 | 32 | ◎印 | 53 頁表裏、黒鉛筆らしきものによる |
| 3 | 41 | ◎印 | 69 頁裏と 70 頁表、黒鉛筆らしきものによる |
| 4 | 1 | 日本語訳 | ほぼ全語句、前半は満洲語の右側、途中からは左側に |
| 4 | 55 | 日本語訳 | 部分的、黒鉛筆らしきものによる |
| 5 | 20 | 日本語訳 | 部分的、黒鉛筆らしきものによる |
| 5 | 46 | 線 | 100 頁裏【写真 7】と 101 頁表裏 |
| 6 | 35 | 日本語訳・線 | 日本語訳は部分的、黒鉛筆らしきものによる・<br>線は 95 頁表 |
| 7 | 10 | ◎印 | 37 頁表と 38 頁表、黒鉛筆らしきものによる |
| 7 | 11 | ◎印 | 40 頁裏と 41 頁表と 42 頁表、黒鉛筆らしきものによる |
| 7 | 18 | ◎印 | 66 頁表、黒鉛筆らしきものによる |
| 7 | 23 | 線 | 84 頁裏、黒鉛筆らしきものによる |
| 7 | 24 | ◎印 | 91 頁裏、黒鉛筆らしきものによる |
| 7 | 25 | ◎印 | 93 頁表、黒鉛筆らしきものによる |
| 7 | 26 | ◎印 | 99 頁表、黒鉛筆らしきものによる |
| 7 | 27 | ◎印 | 103 頁裏、黒鉛筆らしきものによる |
| 7 | 42 | 日本語訳 | ほぼ全語句 |
| 7 | 45 | 日本語訳 | 部分的、黒鉛筆らしきものによる |
| 7 | 54 | チェックの「レ」印 | 213 頁裏、黒鉛筆らしきものによる |
| 8 | 1 | 日本語訳 | 全語句 |
| 8 | 14 | 日本語訳 | ほぼ全語句 |
| 8 | 15 | 日本語訳 | 全語句 |
| 8 | 25 | 日本語訳・〇印 | 日本語訳は部分的、黒鉛筆らしきものによる・<br>〇印は 109 頁表、黒鉛筆らしきものによる |
| 8 | 26 | 日本語訳 | 部分的、黒鉛筆らしきものによる |
| 8 | 28 | 日本語訳・線 | 日本語訳は部分的、黒鉛筆らしきものによる・<br>線は黒鉛筆に加え、赤鉛筆によるものもある |

＊「備考」で特に断っていない限り、書き込みは専ら黒ペンらしきものでなされ、日本語訳は満洲語の右側にふされている。

**【附録 2】『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込みと『満州語教本』の日本語訳対照**

［凡例］

1. 以下の（a）～（d）はそれぞれ次のとおり。
   （a）本文満洲語
   （b）『満蒙漢三文合璧教科書』の書き込み日本語訳
   （原本も語句ごとに訳文がふされている）
   （c）『満州語教本』の日本語訳
   （原本の日本語訳は本文満洲語のあとにまとめて書かれているが、ここでは便宜上、該当する満洲語部分に併記する形で示す）
   （d）笠井信夫氏のものと推定される書き込み。
   （専ら本文満洲語の語句ごとにその右側にふされている。なお、「jasigan be ulara kuwecihe 傳書鴿」の課に（d）の書き込みはない）
2. 下線は本文中で言及した特徴が見られる箇所。
3. ［　］で示した箇所は書き込みの左右にさらに追加された書き込み。

**afara baita 職業**

（（d）は課タイトル「afara baita」の右横に「汗水タラシテスベキシゴト」とある）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| （a） | niyalmai | beyebe | ilibure | de, | urunakū |
| （b） | 人 | 身ヲ | 立ツル | ニ於テ | 必 |
| （c） | 人ノ **我カ** | 身ヲ | 立ツル | **ニ際シ**。 | 必ズ |
| （d） | 人ノ | 自分 | 立ツル | **ニ［時ニ］** | キツト |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | afara | baita | bi, | bithe | hūlarangge | bithei |
| （b） | **攻ム可キ** | **事** | | 書 | 読ム者 | **書物ノ** |
| （c） | **職** | **業** | アリ。 | 書ヲ | 読ム者ヲ | **学** |
| （d） | ナスベキ | シゴト | アリ | | ヨム | 学 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | niyalma | sembi, | usin | tarirengge | usisi | sembi |
| （b） | **人** | ト云**フ** | 田ヲ | 耕ス者 | 農ト | 云**フ** |
| （c） | **者** | ト云**ヒ**。 | 田ヲ | 耕ス者ヲ | 農ト | 云**ヒ**。 |
| （d） | 者 | | 田ヲ | 耕スモノ | | |

（a） ulin jaka weilerengge faksi sembi, ulin jaka
（b） 貨 物 作ル者 **博士** ト云**フ** 貨 物
（c） 貨 物ヲ 造ル者ヲ **工** ト云**ヒ**。貨 物ヲ
（d） 百 貨 職人 百 貨

（a） tuwelerengge hūdai urse sembi, gurun boode
（b） 賣ル者 **商フ 者** ト云フ 国 家
（c） 販売スル者ヲ **商** ト云フ。国 家ヲ
（d） 国 家ヲ

（a） karmame tuwakiyarangge cooha sembi, bithei niyalma usin -i
（b） **守リ 護ル者** 兵ト 云フ
（c） **守 護スル者**ヲ 兵ト 云フ。 **士農**
（d） マモル マモルモノ 兵

（a） haha weilere faksi hūdai urse, gemu cooha kaci［sic.bici］
（b） 皆 兵丁 アレバ
（c） **工商** 皆 兵 タルヲ
（d） 男 職 人 商 人 皆 兵

（a） acambi, usin -i haha weilere faksi hūdai urse
（b） 可ナリ **田ノ 人** **製造 博士** **商 者**
（c） 宜シトス。 **士 農 工 商**
（d）

（a） coohai urse, gemu bithe hūlaci acambi.
（b） **兵 丁** 皆 書ヲ **ヨム** **可シ**
（c） 皆 書物ヲ **読ムヲ宜トス。**
（d）

**aniya inenggi 元旦**

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | aniya | inenggi | de, | ahūn | deo | -i | emgi, | eshen | -i |
| （b） | **年［ノ］** | **日** | ニ於テ | 兄［ハ］ | 弟 | ト | 共ニ | 叔父 | ノ |
| （c） | **元** | **旦** | ニ。 | 兄 | 弟 | | 共ニ。 | 叔父 | ノ |
| （d） | 元 | 日 | | 兄 | 弟 | | 共々 | オジ | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | boode | isifi | aniya | de | urgun | -i |
| （b） | 家ニ | 到リ | **年** | **ニ於ケル** | **禧** | ニ |
| （c） | 家ニ | | **年** | | **賀** | ニ |
| （d） | 家ニ | 来タ | 年 | ニ於ル | ヨロコビ | ニ |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | acajifi, | | kumun | -i | jilgan | be | donjifi, |
| （b） | **行キ合ヒ［行キニ合ハセ］** | | 音楽 | ノ | 音 | ヲ | 聞キ |
| （c） | **来タ**。 | | 楽 | ノ | 声 | ヲ | 聞キ。 |
| （d） | 合ヒニキタ | | | | 音 | ヲ | キイテ |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | deo | ambula | urgunjefi, | eshen | hendume, | si |
| （b） | 弟（ハ） | 大ニ | **喜ヒ** | 叔父 | 曰ク | 汝 |
| （c） | 弟ハ | 甚タ | **喜ンタ**。 | 叔父 | 曰ク | 汝 |
| （d） | 弟ハ | 甚ダ | 喜ンタ | | イフ | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | urgunjembio, | bi | sini | cihai | efimbi | sefi, |
| （b） | 喜ブヤ | 我 | 汝ノ | 自由ニ | **弄ブ** | **ト云ヘバ** |
| （c） | 喜ブカ。 | 吾ハ | 汝ガ | 自由ニ | **弄スルガヨイ**。 | |
| （d） | ヨロコブカ？ | | | 自由ニ | モテアソベ | トイツタ |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | deo | buleri | be | fulgiyeme, | jilgan | be | šanggahakū, |
| （b） | 弟ハ | 喇叭 | ヲ | **吹キ［クモ］** | **音** | ヲ | ナサザリシ |
| （c） | 弟ハ | 喇叭 | ヲ | **吹イタ**。 | **声** | ヲ | 成サズ。 |
| （d） | | ラツパ | | | 音 | ヲ | 成サザリキ |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | longkon | tungken | be | foriha | de, | geli | kemun | de |
| （b） | 銅鑼 | 大鼓 | ヲ | 打チシ | ニ於テ | 又 | 節 | ニ |
| （c） | 銅鑼 | 太鼓 | ヲ | 撃ツ | ニ。 | 又 | 節 | ニ |
| （d） | ドラ | 太鼓 | ヲ | ウチシ | ニ | | | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | acanarakū, | ahūn | deo | -i | baru | hendume, |
| （b） | 合ハズ | 兄［ハ］ | 弟 | ニ | **向ヒ［テ］** | 曰ク |
| （c） | 中ラズ。 | 兄 | 弟 | ニ | **謂テ** | 曰ク。 |
| （d） | | 兄ハ | 弟 | ニ | 弟ニ向イテ | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | sarašame | efire | ajige | baita, | ureburakū | |
| （b） | **遊ヒ** | **戯レン** | **小ナル** | **事**［モ］ | 習ハズ（サレバ） | |
| （c） | **遊** | **戯スル** | **小** | **事**。 | 習ハサレバ | **是** |
| （d） | アソビ | タハムル | 小サナ | コトデモ | | |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | hono | muterakū | bade, | tacin | fonjin | be |
| （b） | 又 | 能ハズ（ザル） | **場合ニ於テ** | 学 | 問 | **ヲ** |
| （c） | 又 | ［不可］能ノ | **場合デアル**。 | 学 | 問 | **ニ於テハト**。 |
| （d） | 尚 | 能ハ〆ヌ | 場合ニ於テハ | 学 | 問 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| （a） | ai | hendure | sehebi. |
| （b） | **何ト** | **曰ハン［ト］** | **云ヘリ** |
| （c） | | | |
| （d） | アア | | |

**jasigan be ulara kuwecihe 傳書鴿**

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | kuwecihe | -i | banin | fe | de | narambi, | udu |
| （b） | 鳩 | ノ | **性** | 旧 | ニ | **慈着** | 幾何 |
| （c） | 鳩 | ノ | **性質** | 旧 | ヲ | **恋フ**。 | 多少 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | goromime | yabume | udu | tanggū | ba | de | isinacibe, |
| （b） | **遠サカリ** | **行キ** | 数 | 百 | 里 | ニ | 到達スルモ |
| （c） | **遠** | **行シテ** | 幾 | 百 | 里**ノ地** | ニ | 至リシト雖ドモ |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | umai | terei | fe | feye | de | bederehekūngge |
| （b） | 決シテ | 其 | 旧 | 巣 | ニ | 帰リ来ラサリシコト |
| （c） | 竟ニ | 其 | 回 | 巣 | ニ | 帰ヘラサリシコトハ |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | akū, | tuttu | niyalma | ujirengge | labdu, | ememu | ede |
| （b） | ナシ | 故ニ | 人ガ | 飼畜スルコト | 多シ | 或ハ | 此所［此点］ |
| （c） | ナイ。 | 故ニ | 人カ | 畜フコト | 多イ。 | 或ハ | 之ニ |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| （a） | akdame | jasigan | ulara | baitalan | obumbi, |
| （b） | 信頼シ | 信ヲ | 傳フル | 用メアシム［**用ヲ**］［**ナサシム**］ | |
| （c） | 籍リテ | 書ヲ | 送ル［傳ル］ | **用ヲナサシム**。 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | sung | gurun | -i | kioi | duwan | cooha | be |
| （b） | 宋 | 國 | ノ | 曲 | 端 | 軍［兵］ | ヲ |
| （c） | 宋 | 国 | ノ | 曲 | 端 | 兵 | ヲ |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | dasara | de, | hergin | fafun | cira | getuken | jang | giyon |
| （b） | 統治スル | 時 | **紀** | **律** | **厳** | **明** | 張 | 浚 |
| （c） | 治ムル | 時。 | **紀** | **律** | **厳** | **明**。 | 張 | 浚 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | kemuni | terei | kūwaran | be | baicame | tuwara | de, |
| （b） | 嘗テ | 其ノ | 軍 | ヲ | 察 | 視スル | ニ |
| （c） | 嘗テ | 其 | 営 | ヲ | 察 | 視シタ | 時。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | cib | seme | emu | niyalma | akū | ofi, | ferguwefi, |
| （b） | 聞ト | シ | 一 | 人 | **ナク** | **シテ** | 怪シテ |
| （c） | 聞ト | シテ | 一 | 人モ | **ナカツタ**。 | | 異シテ |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | kioi | duwan | -i | baru | hendume | bi | baicame |
| （b） | 曲 | 端 | ニ | 向ヒ | 曰ク | 我 | 査ス可キ |
| （c） | 曲 | 端 | ニ | 向テ | 曰ク。 | 我 | 察視シ |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | tuwaki | seme | sehede, | kioi | duwan | kadalaha |
| （b） | 視ント欲ス | ト | **云ヒニ於テ［云ヒシ時］** | 曲 | 端 | 管セシ |
| （c） | 度タイ | ト | **云フタ特**［sic. 時］。 | 曲 | 端ハ | 管スル |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | sunja | kūwaran -i | coohai | dangse | be | alibufi |
| （b） | 五 | 営 ノ | 兵 | 檔子 | ヲ | **呈シ** |
| （c） | 五 | 営 ノ | ［兵ノ］ | 檔子［兵員名簿］ | ヲ | **進メタ**。 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | jang | giyūn | terei | emu | meyen | be | baica | seme | afabuha |
| （b） | 張 | 浚ハ | 其 | 一 | 部 | ヲ | 査スル可ク | | 命ジタ |
| （c） | 張 | 浚 | 其 | 一 | 部 | ヲ | 点捨セセント | | 命ヲ下シタ |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | de | kioi | duwan | tinggin | -i | siden | de, | horin | be |
| （b） | 時 | 曲 | 端ハ | 庭 | ノ | 間 | ニ於テ | 籠 | ヲ |
| （c） | 際。 | 曲 | 端 | 庭 | ノ | 間 | ニ於テ。 | 籠 | ヲ |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | neifi | emu | kuwecihe | be | sindame | genehe | manggi, |
| （b） | 開キ | 一ノ | 鳩 | ヲ | 放チ | **ヤリシ 後** | |
| （c） | 開キ | 一 | 鴿 | ヲ | 放チ | **出シタヨ**。 | |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | baicaki | sere | cooha | dahanduhai | isinjifi, | jang | giyūn |
| （b） | 査セント | スル | 兵 | 踵ヲ接シテ | **到着シ** | 張 | 浚 |
| （c） | 点検セント | 欲スル | 兵 | 随テ | **至レリ**。 | 張 | 浚 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | erei | jalin | sesulafi, | sirame | wacihiyame | tuwaki |
| （b） | 其ノ | 為メニ | **愕キ** | 続イテ | 残サズ | 視ント欲 |
| （c） | 其ノ | 為メ | **愕イタ**。 | 続イテ | 盡ク | 視ンコトヲ欲セリ。 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （a） | seme, | tereci | funcehe | kuwecihe | be | gemu | sindafi, |
| （b） | シ | 其ヨリ | 餘レル | 鳩 | ヲ | 皆 | **放チ** |
| （c） | | 是ニ於テ | 残リタル | 鴿 | ヲ | 悉ク | **放チタ**。 |

（a） geren　cooha　dartai　andande isifi,　gejun　uksin　gehun
（b） 衆　兵　忽然　瞬間　到リ　**戈　甲　燠**
（c） 各　軍　頃刻ニシテ　集リ。　**戈　甲　燠**

（a） giltaršame,　kiru　turun　narhūn　genggiyen
（b） **燦　旗　幟　精　明**
（c） **燦**。　**旗　幟　精　明**。

（a） gūsin aniyai onggolo,　pu　gurun　-i　cooha　fa
（b）　普　國　ノ　兵　法
（c） 三十　年　前。　普　国　［ノ　兵］　佛

（a） gurun　be　afafi,　ba　lii　hoton　be　kame,
（b） 國　ヲ　攻メ　ハ　リ　城　ヲ　囲
（c） 国　ヲ　攻メ　巴　里　城　ヲ　囲ミ。

（a） asuru　hafirabure　de,　tulergi　dorgi　giyalabume　lakcafi,
（b） 甚　急逼セン　時ニ　**外　内**　隔テラレ　断チ
（c） 其　急ナル　時。　**内　外**　隔　断シ。

（a） fa gurun　-i　niyalma　kuwecihe　baitalame　jasigan　be
（b） 法 國　ノ　人ハ　鳩ヲ　**用**　信　ヲ
（c） 佛 国　ノ　人　鴿ヲ　**用ヒテ**　書　ヲ

（a） ulafi,　mejige　be　hafumbufi,　kaha　be　suhe
（c） 傳へ　消息　ヲ　**通セシメ**　重囲　ヲ　解タ
（c） 傳テ　消息　ヲ　**通シタ**。　囲　ヲ　解キシ

（a） amala,　kuwecihe　ulaha　jasigan　be　uherileme　bodoci,
（b） 後　鳩ノ　傳ヘリ　信　ヲ　**綜ブ可ク　計レバ**
（c） 後。　鴿ガ　傳ヘタ　書　**総　計スレバ**。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| （a） | yaya | tanggū | tumen | funcehebi. |
| （b） | 凡 | 百 | 万ニ | 餘レリ |
| （c） | 凡テ | 百 | 萬ヲ | 餘セリ |